

東京クルーズビジョン【概要版】

I. ビジョン策定にあたって

○ 東京港がクルーズ客船の拠点港として国内外からさらに多くの来訪者を呼び込み、大きな経済効果を取り込むとともに、臨海副都心のMICE・国際観光拠点化を推進するため、東京港におけるクルーズ客船の誘致施策の方向性を示すビジョンを策定する。

※ 策定にあたっては、学識経験者、東京港利用者及び関係行政機関等で構成する検討委員会を設置し、幅広く意見を集約。

II. 東京港をめぐる状況

クルーズ市場の動向

- ◆ 世界的な客船の大型化、クルーズの大衆化によるクルーズ人口の増加
- ◆ アジア地域のクルーズ市場の急成長（日本に就航する外国客船が増加）
- ◆ 日本国内のクルーズ人口の急増（2011年16万人→2012年21万人）

東京港の現状

- ◆ 晴海客船ふ頭手前のレインボーブリッジ（海面からの高さ52m）の下を通過できない大型客船が近年急増しているなど、施設面で十分でない。
- ◆ 首都東京の港であるにもかかわらず客船利用回数が少ない。

クルーズが急速に身近なものとなる中、「首都の玄関口」である東京港が、利用者の期待に十分に答えていくことが必要。

III. 「首都の玄関口」東京港が目指す姿

1. 基本的な考え方

- 東京ならではの強みを活かす
 - ① 交通アクセスの充実：東京駅、羽田空港に近接、国内外へのアクセス至便
 - ② 観光資源の充実：都心に近く、都内の観光やショッピングに便利
 - ③ 背後圏の人口集積：首都圏4000万人の人口が集積

⇒ 東京の「集客力」を活かすため、発着港としての体制強化を中心に据える。

2. 主なターゲット

- <日本籍船>
 - ◆ 母港化の推進（年間を通じて安定した利用回数を確保）
- <外国籍船>
 - ◆ 乗客数千人規模の大型クルーズ客船の発着・寄港
 - ◆ フライ&クルーズ（往路または復路が航空利用のクルーズ）の発着

3. 今後の施策

- ・ 世界最大の客船にも対応可能な新客船ふ頭を臨海副都心に整備。（2020年東京オリンピック・パラリンピック開催を見据え、早期開業を目指す）
- ・ 利用者の利便性を追求した施設整備を行うとともに、より積極的な誘致活動を展開。

【2028年（平成40年）時点での年間誘致目標】

東京オリンピック・パラリンピック開催や新客船ふ頭供用開始等を踏まえ、
東京港クルーズ利用人口50万人、クルーズ客船利用回数280回と設定

